

謝名城 (1)

——村落社会における文化の重層性についての覚え書き——

樋 口 淳

青い海に囲まれた沖縄の、「山原」^{やんばる}と呼ばれる本島北部には、豊かな自然が広がっている。山々が海辺近くまで迫り、なかなか人を寄せつけない。地図を広げてみればわかる通り、村はあたかも深い緑のテーブル・クロス縁を飾るレースのように、海辺に一つまた一つと続いている。山中には、人の住む集落は存在しない。山原の人たちはなぜ、こんな風に自分たちの村を作ってきたのか。これは、簡単には答えられない疑問である。しかしその手がかりの一つの極には、厳しい自然の条件があり、またもう一つの極には、海の向うにニライカナイという他界を措く独自の宇宙観があるのだろう。

謝名城^{しゃなぐしく}は、この山原の西海岸沿いのほぼ中央にある、百戸たらずの小さな集落である。行政上は、国頭郡大宜味村に属する一つの字だが、明治三六年の合併以前には、さらに城^{ぐしく}、根謝銘^{ねじやめ}、一名代^{てんなす}という三つの地区にわかれ、それぞれが村と呼ばれていた。⁽¹⁾（謝名城というのは、この三つの集落のそれぞれ一字づつをとった、ここ百年ほどの新しい地名にすぎない。）謝名城の人々は、今もこの三つの地区を、独立した構成単位である「マク」として意識しており、その境界もはっきり定められている。⁽²⁾

集落の山方には、もっとも歴史の古い、城集落^{ぐしく}があり、それに連るウイグシク（上城）杜^{むい}には御嶽^{うたき}を中心とし

図1 謝名城周辺 (国土地理院発行 2万5千分の1地形図「辺土名」図幅)



- ① ウイグシク杜 ② ヲガミ杜 ③ ピー山 ④ 見里
 ⑤ 親田 ⑥ 屋嘉比 ⑦ 屋嘉比川 ⑧ 浜

た聖地と根謝銘城跡がある。現在この城跡には、フッキーという野面積みの石垣が、わずかに残されているにすぎないが、かつては沖縄北部国頭地方一帯の支配者であった国頭按司の居城であったと推定される⁽³⁾。またこの城の北を流れる屋嘉比川と、その川口に開けた港は、本土との交易の拠点であり、この港を通じて按司の支配に与って重要な鉄がもたらされた⁽⁴⁾。

しかし王制と中央集権の整備とともに、尚真王時代(一四七七年から一五二六年)に国頭按司が首里に居を移し、さらに一六七三年に新たに田港間切が設置され、広大な国頭間切が屋嘉比川をほぼ境として二分されると、謝名城は二つの間切の境界に位置することとなり、かつての中心としての性格を少しづつ変形させてゆく。新らしい間切は、十年ほどして大宜味間切と名をかえたが、その政治は、塩屋湾に面した田港から大宜味、そして塩屋の番所に移され、もはや城にもどることはなかった。また国頭間切の番所も、当初は屋嘉比川の川口の浜集落に置かれたが、やがて奥間^{おくま}から辺土^{へんと}名へと少しづつ北に移されてゆく⁽⁵⁾。

こうした政治権力の変遷は、按司のオナリ神として政を宗教的に支えていたノロの組織とその聖地にも、少なからぬ影響を与えたに違いない。現在、謝名城には城ノロ^{ぐしく}、となりの田嘉里^{たかざと}には屋嘉比^{やかかび}ノロを中心とした神人組織があるが、この二つの組織は、根謝銘城社を中心とした聖域の管理をめぐる複雑に交錯している。その勢力の交替のあとは、今となっては伝承によってたどることすらむずかしいが、根謝銘城の歴史と深くかかわっているように思われる。

そしてまたこの山原の小さな集落の生活の中に、埋めこまれた文化の層は、こうした王国の政治・宗教の力学をさらに以前にさかのぼり、複雑な様相を見せている。たとえば人々の信仰体系の中に組み込まれた他界観一つとってみても、(1)水平的な海上他界(ニライカナイ) (2)垂直的な天上他界(オボツカグラ) (3)墓地の地下他界(ゲ

ソ)の少なくとも三つが複合している。この複合も、おそらくは歴史の歩みと呼応しているのだろう。またこれらの他界から訪れる神を送り迎えしたり、死者を葬り、他界へと送り届けたりする祭の主宰者も、(1)複数の共同体を統轄し、御嶽とアサギを中心に祭を行う女たち中心の神組織 (2)単一のマク共同体の祭を行う男たち中心の神組織 (3)一族(門中)の神を祀る神組織 (4)各戸の祖先を祀る者 (5)各戸の火の神を守る者 (6)死者を送る葬儀を主宰する者などによってそれぞれ神を祀る者の組織や性格が異ってくる。

本稿では、謝名城という山原の小さな集落の歴史を背景としながら、その信仰体系と他界観、そして社会組織の重層性を明らかにすることを第一義とする。そしてさらにこうした各層を生み出した謝名城の人々の生活、ことに海と山と里との三つの領域における生活を考えてみたい。そこには山や荒地を中心とした自然採取のソテツ、トチの実などの利用、焼畑耕作中心のイモやアワ、川ぞいの山田や低湿地の水稻耕作など、さまざまの農業形態や食生活の複合がみられる。また山における木々の伐採や炭焼などの仕事、猪との闘い、海における追いこみ漁の組織やとれた魚の売り捌きなどの生業の中にも、異種の文化相の交錯や重層化が存在するように思われる。

これらのことをできるかぎり正確に記述し、仮説をたて、検証してゆくために、まず謝名城の人々の生活空間の構成を考えることからはじめてみたい。特に屋敷と聖域の配置には人々の世界観(コスモロジー)が、目に見えるかたちで表現されているはずである。

(1) 屋敷・門中・御嶽

謝名城で日常的に用いられる親族用語には大きく分けて三つの系統がある。一つは、双系的ないしは多系的親族集団である「ファロージ」であり、⁽⁶⁾同じハラから生れた者(ハラ・ウジ)をあらわすという。この言葉は、親を

同じくする者という意味の「ウエーカー」とほぼ同義に用いられている。この言葉を用いながら父方と母方を区別する場合には「ウヒガンハタ（父方）のファロージ」、「ウナグンハタ（母方）のファロージ」という。

二つ目の系統は、サニ（種）の概念と強く結びついた「シジ」という用語である。シジは「筋」の意味であり、サニは父から子へと伝えられて同じ筋の父系親族集団を形成する。⁽⁷⁾母方親族、妻方親族などは「グエーシチ（シジ）」と呼ばれる。これは縁あってあとから結ばれた者、つまり「御縁筋」の意味であるという。

三つ目の系統は「ムンチュウ（門中）」である。門中は今日、沖縄本島中・南部を中心に広い分布をもつ用語であるが、周知のように歴史の比較的新しい言葉であり、その意味にも地域によってかなりのヴァリエーションがみられる。しかし謝名城の場合には、門中は「一人の男祖を共通にもつ（父系血縁の集団）」として広く理解され受けいれられており、清明祭を中心とする門中祭祀も民俗のうちに定着している。⁽⁸⁾また神人組織もいまではこの概念と結びつけて考えられているので、本稿ではとりあえず門中を手がかりとして、検討をすすめることとする。

現在、謝名城には十三の門中が数えられるが、それはさらに三つの大きなグループに分けられる。一つは、ウイグシク杜にある二つの御嶽のうち中城御嶽を拝所とする門中のグループ。その中核となるのは、新屋・松下門中である。新屋・松下門中は、後に述べる謝名城の神人組織の中核となる「七重のヤジク神」のうち根神とチキシユ神とをのぞく、ノロ、若ノロ、セーフア神、サンナム神、勢頭神を出す最も重要な門中である。このグループには、他にウルグチ門中、新謝銘門中、^{しんじやみ}下当門中、^{さあた}金細工屋・新屋門中、^{ほんじやくや}上當門中の五つが属するが、ウルグチ、新謝銘、下当は、いずれも新屋・松下門中の分かれである。これに対して金細工屋は、代々按司家につかえる鍛冶職として独自の系譜を持ち、⁽⁹⁾現在ではその分かれである一名代新屋とともに一門中をなす。また上當は、新屋・松下と同じ平良姓を名乗っているが、歴史はまだ浅く、初代は大宜味村塩屋からの移住者であると伝えら

れる。

二つめの門中グループは、大城御嶽を拝所とする。大屋門中と野里門中がこれに属する。わずか二つの門中だが、根謝銘地区を中心として三十戸ほどの家がこれに属し、古い歴史を持つ。ことに大屋門中の元屋（宗家）は、アダンガー・ムグンガーという村建の始祖神話をもち、根神を代々輩出するトゥナイ（根神屋）とウナイ・ウツキーの関係となる根人（にんちゆ）の家であると考えられている。

三つめのグループは、謝名城以外に門中の拝所をもつ。嵩根門中（たひに）（田嘉里系）、玉屋門中（たまや）（田嘉里系）、宮城門中（まあくしく）（首里系）、根路銘門中（ねろめ）（首里系）、仲門門中（なはじよう）（中城系）⁽¹⁰⁾の五つの門中がこれに属するが、田嘉里系の嵩根門中から神人組織の中核の一人であるチキシユ神が出ていることは注目すべき事実である。もちろんこのほかに、首里の土族や他村からの移住者でまだ家の歴史が浅く門中として認められていない人々がいる。

さて以上の事実留意しながら、図2、3を見てみよう。まず図2は、謝名城の複数のインフォーマントの記憶をたどり、出来るかぎり昔の屋敷地を再現したものである。そこには現在移住のために空地となった屋敷も、主の変わった屋敷もかつての屋号で記入されている。（ただし拝所は、本稿に関するものに限定されている。）謝名城は、明治十三年の『沖縄県統計概表』によれば城村二十一戸、根謝銘村三十七戸、一名代村二十一戸計七十九戸であるから、⁽¹¹⁾図2に示された城地区二十六戸、根謝銘地区五十六戸、一名代地区四十戸、計一二二戸は、かなり多い数字である。このことは昭和五十九年度の村勢要覧による九十八戸という戸数や、大正十年の大宜味郵便局の資料による一〇六戸という戸数と比べてみてもかわらない。⁽¹²⁾つまりこの図に示された屋敷の配置は、おそらく明治以降くり返された分家による屋敷地の分割や、かつての畑や荒地への進出の様子をかなり忠実に示しているといつてよいだろう。いまここで、インフォーマントの証言や屋号などから、明らかに新しいと簡単に推測され

る二十四戸をひいてみると一〇〇戸となり、数字の上では大正期の戸数に近づく。

そこでこうした配慮を加えた上で、屋敷地の分布を三つの門中グループにわけると図3がき上る。

この図によってはっきりしてくるのは、まず城地区における新屋・松下門中系統の圧倒的優位である。城地区は、ウイグシク杜につらなり、多くの聖地に囲まれている。まず④のあたりには按司時代以降この地を治めた支配者の屋敷地跡といわれる御殿があり、そのすぐ下の⑤には首里からの役人たちの宿舎跡の首里前すうめまえがある。この地は、右手にかつての屋嘉比港である浜の海を臨み、左手に嘉如嘉の海を臨む景勝の地であるが、支配者にとつては、最良の地の利を得た要害であったと思われる。そしてその首里前の下の①が、門中の元屋の松下屋敷である。そしてさらにその下に位置する⑬がノロ家の新屋屋敷である。この門中の伝承によれば、新屋と松下はかつて一つであったが、一族の事情によって、長男である新屋が分家してノロ家を継承し、次男である松下が先祖伝来の屋敷を受け継いだという。そして松下は、城の御嶽を中心とした聖地を管理し、中城御嶽にある地頭火神を守ることになった。一方分家した新屋のノロは、城集落の上にある⑧のノロ殿地の火神を守り、ノロ田を管理する。つまり城は、ウイグシク杜を腰当くさてとして、聖地に最も近い上手に元屋を置く沖縄の村落の一つの典型を、示しているのである。

次に根謝銘地区をみると、ここにも沖縄村落の典型が見られる。根謝銘は三方をウイグシク杜むいとウガミ杜むいとヒー山うふがわとに囲まれ、大川を擁した小さな盆地であるが、そのウガミ杜につらなり、ちょうど扇形に大川に向かって広がっているのが、大屋門中と野里門中の屋敷である。そしてこのウガミ杜こそ、『琉球国由来記』(一七二三年)にガナハナ御嶽として記された聖地であり、今日では根神の管理する聖地とされている。根神は、旧三月と旧九月の御願プセーにこの聖地の清掃を行い、聖域を示す左繩を張る。そして根人にんちゆである大屋門中の元屋(屋号大屋・

図2④⑧)とそのウナイとなる根神屋(屋号トゥナイ・図2⑤)は、ウガミ杜の山裾から中央にかけての重要な軸の上にある。つまり城集落が、ウイグシク杜を腰当として新屋・松下門中を中心に出来上っているように、根謝銘集落は、ウガミ杜を腰当として、大屋と野里の二つの門中を中心にして出来上っているといえそうである。

しかしもちろん謝名城にすむ人たちにとっては、この二つの集落の構成や歴史はそのように簡単なものではない。そこにはさまざまな聖地があり、伝承があり、他集落との関りもきわめて複雑である。たとえば、城集落にはノロはいるが根神はいない。集落としての城の歴史の深さは、根謝銘城社の存在や聖域との関りによって充分に推測されるのだが、これはどうしたことだろう。周知の通り、沖繩の信仰の古層には根神と根人のかたい絆があり、その歴史は中央集権的なノロ組織以前にさかのぼる。

宮城栄昌によれば、沖繩の「中央・地方の神女の組織化が顕著となったのは第一尚氏王統時代(一四〇六～一六九)で、それが確立したのは第二尚氏王統の尚真王(一四七七～一五二六在位)時代であった」という⁽¹³⁾。ことに尚真の時代には、地方神女組織の頂点に三平等大あむしられをおき、各地に公儀ノロを定め、その祭祀管轄区域を固定した。城ノロはこの公儀祝女であるから、一つの仮説としては、この時代に根神から昇格し、同時に城の根人は新たな神人組織の男神である勢頭神となったとも考えられる。こうした根神からノロへの昇格は、謝名城よりさらに少し北の国頭村奥間にも見られること⁽¹⁴⁾で、それほど特別なことではない。

謝名城の場合、事が複雑化するのには、まず城のノロと根謝銘に住む根神との関りである。根神は、のちに詳述するように城ノロの補佐役として、七重のヤジク神という神人組織の中核を占めるが、かつて城に居住したという村建ての伝承を有するのである。それは「アダンガー・ムグンガー」と呼ばれ、大屋門中の元屋と根神屋であるトゥナイとにまつわる話である。

ずうーと、もう昔の事なのだが、もう、年代さえもわからないほど昔、その昔話が伝えられている。大屋とトゥナイ(…)は、昔は兄妹からなったという話。(…)

昔、もう、どこからともわからないが、昔そこに兄妹が来て、このシマに⁽¹⁵⁾住みついたと。

兄^{うつきい}は男なものだから、力があるから、「あー、アダン畑開^あけて、耕^あやして家つくれえ」と。
またその妹^{うない}には、

「お前はもう、女だから、アダン畑よりは開^あけやすい麦畑を耕^あやし、開^あけてから食べなさい。家つくれえ」と。
「それから、村づくりしなさい」と言う事だったって。

それで兄^{うつきい}と妹^{うない}は家をつくり、それから家立ちし始め、村立ちし始めたという。
そして、

「お前はもう、ここの根神になれえ」と兄が妹にいい、妹は根神になった。

そういうわけで、大屋とトゥナイは、いつも隣同志に家を建てて現在に至⁽¹⁶⁾っている。

これは現在の根神である大城茂子さんの語りであるが、村建ての伝承であると同時に、オナリ神の始めの話としても貴重である。茂子さんの語りによれば、かつての大屋とトゥナイの屋敷は、城集落の要地、首里前あたりにあったことになる。そこには今も小さな井戸跡があるが、それは「ウラミヤマガー」と呼ばれ、茂子さんのおばあさんの頃まではそこを拝所としていたという。またその屋敷跡を少し下った田嘉里側には、「ナーガー」という豊かな水源があるが、そのナーガーこそ根人^{にんちゆう}にふさわしい根^にガーではなかったかと推測することも可能である。そしてまた、城集落の腰当であるウイグシク杜には、大城御嶽と中城御嶽との二つの御嶽があることは既に述

べた。この二つの御嶽のうち現在、ノロがつかえ、神アサギがあり、神遊びの庭があり、海神祭がとり行われるのは中城御嶽であるが、歴史の古いのはむしろ大城御嶽の方であると思われる。そして大屋と野里の両門中は、この大城御嶽を拝所とするのである。現在は根謝銘に住む謝名城の根神は、伝承によって城ノロよりも古い歴史を語り、本来の聖地の由緒を守るかのように見える。

しかしこのことを更に複雑にするのは、田嘉里の屋嘉比ノロと謝名城の根神との関りである。たとえば『おもろさうし』卷十三の一七六と一八二のおもろをみると、

一 屋嘉比杜に おわる

屋嘉比杜におわす

親のろは 崇べて

親のろは崇べて

吾^{あん} 守^{まぶ}て

われを身守りて

此^この渡^と 渡^{わた}しよわれ

この渡を渡し給われ

又 あかまるに おわる

赤丸におわす

てくの君 崇べて

* てくの君は崇べて

(一七六番)

一 国笠^{くにかさ}に おわる

国笠におわす

親のろは 崇^{たか}べて

親のろは崇べて

島討^{しまうち}ちしちへ

島討ちをして

按司あじ添おそいに みおやせ

又 屋嘉比杜やかびもり おわる

金丸は 崇べて

又 あかまるに おわる

てくの君 崇べて

又 安須杜に おわる

ましらては 崇べて

又 奥杜おくもりに おわる

玉のきやく 崇べて

按司様に奉れ

屋嘉比杜におわす

* 金丸は崇べて

赤丸岬におわす

* てくの君は崇べて

安須杜におわす

* ましらては崇べて

奥杜におわす

* 玉のきやくは崇べて

(一八二番)

とある。⁽¹⁷⁾これは十四世紀ころから謡われはじめた航海儀礼のおもろで「船急とのおもろ」と呼ばれるものであるが、この二つのうたから推測すると、かつて根謝銘城を拠点としたと思われる国頭按司につかえていたのは城ノ口よりも、屋嘉比ノ口ではなかったかと思われる。

というのは、まず『おもろさうし』に登場する国頭郡の地名は、屋嘉比、赤丸岬、佐手港、安須杜、辺土、奥の六ヶ所にすぎないが、⁽¹⁸⁾これらはおそらく当時の宗教上の要地であったはずである。そこに城の名のないことは必ずしもその軽重の評価には繋がらないが、屋嘉比には、重ねて「親のろ」という高い地位の神女が存在が謡われている。「親のろ」というのは、もちろん後世の制度化されたノ口とは違うが、この地方の政治・社会に対する

当時のノロの影響力は後世よりむしろ強かったに違いない。

城の名がはじめて文献にあらわれるのは、一六三五年から一六四八年にかけて作製されたと思われる『琉球国高究帳』であり、国頭間切一七村のうち屋嘉比村とやらんで城村ときぞか村(喜如嘉村)の石高があわせて示されている。⁽¹⁹⁾ この『高究帳』は、慶長検地(一六一〇年)の際の間切名・村名によっていわれるが、もちろんこれ以前に城村が存在しなかったというわけではない。しかし『おもろさうし』に城のノロについての記録がないことは、かなり重要である。また国頭按司が根謝銘城を中心を治めていたとすれば、按司につかえる神組織の長としての神女は屋嘉比の親ノロ一名でよかつたのではないだろうか。

『高究帳』より百年ほどさかのぼる尚真王の時代(一五〇〇年頃)に、中央集権政策の一環として国頭按司は首里に移り住んでいる。そしてさらに神女組織の整備によって公儀ノロが生まれ、地方の神女たちも按司との関係に最初の楔を打ちこまれた。⁽²⁰⁾ この時代に前述の仮説のように、公儀ノロとして城ノロが登場したか否かは定かではない。またそれが事実であったとしても、まだ屋嘉比ノロの力がまさっていたと考える方が自然であるように思われる。もし両者の間に勢力の拮抗が生まれ、次第にその影響力が逆転する契機をもとめるとすれば、おそらく国頭間切から田港間切が分離した一六七三年以降のことと考えてよいのではないだろうか。

そしてさらに時代が下って『琉球国由来記』(一七一三年)では、⁽²¹⁾ 屋嘉比ノロの管轄区としては、うえた 浜村、うんばる 親田村、見里村、屋嘉比村の四ヶ村、城ノロの管轄区としては、饒波村、喜如嘉村、大宜味村、城村の四ヶ村が記録されておる、これはほぼ現在の管轄区と一致していると考えてよい。⁽²²⁾ しかし『由来記』の国頭間切の各処祭祀の項に屋嘉比ノロの管轄としてヨリアゲ森(浜村)、ガナノハナ嶽(親田村)、トドロキの嶽(屋嘉比村)、中城之嶽(見里村)の四ヶ所が数えられ、大宜味間切の各処祭祀には司祭者の名はないが、小城嶽(城村)、ガナハナ嶽(根謝銘村)

の記録がみえることは注目に価する。ここに記された屋嘉比、親田、見里の三集落は、図1にみるように現在の田嘉里に属しているが、問題となるのは、見里村の聖地とされる中城之嶽と城村の小城嶽、そして親田村の聖地とされるガナノハナ嶽と根謝銘村のガナハナ嶽である。

まず中城之嶽と小城嶽であるが、これはともにかつての根謝銘城の跡のウイグシク杜の聖地をさすと考えてまづ間違いはない。しかし果してこれは複数の御嶽の存在を示しているのだろうか。現在この地には、図2②の中城御嶽と③の大城御嶽とがある。中城御嶽はすでに述べたように城ノロの管轄であり、海神祭をはじめとする祭もここで行われるし、聖域を示す左縄は城ノロたちの手によって張られる。これに対して大城御嶽は、同じ頂の中城御嶽からほんのわずか高い北の位置にあるだけだが、すでに屋嘉比ノロの管轄であり、左縄も田嘉里の人々によって張られる。このことがそのまま二つの御嶽の歴史的な管轄の違いと、独立性を証明してくればよいのだが、『琉球国由来記』をみるかぎり、二つの御嶽の神名は「大ツカサヌシ」(小城嶽)と「大ツカサ」(中城之嶽)とされ、おそらくは同一である。そして更に、具合の悪いことには、現在城ノロの管轄である中城御嶽が『由来記』では「中城之嶽」と記され屋嘉比巫崇所として見里村に属しているのである。『由来記』の記事には、形式その他不備の点が多いが、これは簡単に誤記としてはすまされないように思われる。しかしまたこれが正しければ、疑問は容易には解消し難いものとして残る。

さて次に親田村の「ガナノハナ嶽」と根謝銘村の「ガナハナ嶽」であるが、これは二つとも現在のウガミ杜にある聖地のことをさすと考えてよいと思う。⁽²³⁾『由来記』の神名も「シチャラノワカツカサ」(ガナノハナ嶽)と「シチャラノワカツカサ御イベ」(ガナハナ嶽)と一致する。しかしここでまた問題となるのは、明らかに屋嘉比ノロの崇所であるこの聖地が、同時に根謝銘村の帰属とされていること。そしてさらに現在も、この聖地が城ノロの

管轄とはされず、根謝銘に住む根神の手で聖域を示す左縄が張られていることである。この長い歴史の中に埋めこまれた、ガナハナ嶽をめぐる屋嘉比ノロと謝名城根神との強い結びつきは、ウイグシク杜に關しても明らかにされる。つまり謝名城の根神を擁する大屋門中と野里門中が、屋嘉比ノロの管轄である大城御嶽を門中の拜所とするということである。この二つのことから、かつては屋嘉比ノロが国頭按司のオナリ神として、ウイグシク杜の御嶽とウガミ杜の御嶽での祭を主宰し、根謝銘に住む根神はそれにつかえていたのではないかと推測することができる。

そしてこの推測をさらに補強するために、大城御嶽の田嘉里より「屋嘉比アツタイ」と呼ばれる土地があることを指摘しておくのもよいだろう。つまり現在の屋嘉比は、図1の⑥のように屋嘉比川の対岸にあるが、かつてはウイグシク杜に続く高台に屋敷地があったかもしれないというのである。

とはいえ、今日の根謝銘集落のきわめて安定した門中の屋敷分布と、アダンガー・ムグンガーの伝承とを繋ぐ糸を見出すことは困難な作業である。伝承の通り大屋とトゥナイの屋敷が首里前のあたりに位置していたとすれば、いったいいつ頃この二つの屋敷は根謝銘に下りたのか。この移住が我々の推測するように、城ノロが大きな力を持つようになったかもしれない一六七三年を一つの契機とするならば、わずか三百年ほどの間に、このように整然とした門中の住みわけを確立するのはむずかしかろうと思われる。このことは、三つの地区のうち、もっとも新しい一名代の場合を考えれば、より明確になる。

一名代は、さきに述べた田港間切の創設（一六七三年）はおろか、『琉球国由来記』（一七一九年）にも名前がない。この村の名が始めて登場するのは、『元文竿入帳』からであるというから、村の創設は一七一九年から一七三六年の間となる。⁽²⁴⁾ こうした歴史の新しさは、一名代の屋敷の分布にかなりはっきりと表れているように思われる。

この地区で最も大きな門中は、金細工屋・新屋門中であるが、その屋敷地も新設の屋敷をとり除いてしまうと、上当、仲門といった新興勢力に対して地理的な優位を示すことができない。むしろ新旧さまざまな門中がモザイク状に交錯し、その間に外部からの移住者の屋敷が点在するという方が正しいと思う。そして何より決定的なことは、腰当とする杜を近くにもたず、歴史のある聖域を伝えていないことである。

しかしこの一名代も、少く見積って二五〇年余の歴史がある。また村という行政単位として公認される以前にも、いくつか屋敷があったにちがいない。

こうしてみると、村落としての根謝銘の歴史は、かなりの歳月を経たものと考えられる。現在の根謝銘の屋敷の分布を考えると、一名代と同じような屋敷地の交錯が見られるのは、大川ぞいのベルト地帯だけである。この地帯には謝名城のほとんど全ての門中が屋敷を並べ、うち四つの門中の元屋が見られるが、その三つは本来謝名城以外に門中の拝所をもつ人々の元屋である。つまりこれも大川ぞいのこの地域の歴史の新しさを示している。

そしてしかも、この地域の中でも図2⑦⑤の嵩根小と②③の^{マイ}新地の屋敷は注目に値する。まず⑦⑤の屋敷は、ミッカ―ガーという古い井戸を拝所としてもつ野里門中の重要な屋敷であるが、ウガミ山と並んで根謝銘地区の大切な拝所であるピー山のすぐ麓にある。ピー山は、誰も腰当山とは考えはしないが、たとえば、五月五日の山御願の時には、この頂で念入りな拝みが行われる。つまり背後に広大な山を控えた謝名城の、山の神へのお通しのための重要な拠点なのである。

つぎに②③の新地屋敷に関して言えば、大屋門中に属する。このあたりは通称ヒサンメーと呼ばれ、城地区に組み込まれているが、やはり多くの聖地を抱えている。そしてその多くの聖地の中でもっとも大切なのが、新地屋敷のわきにある「ミーンズバー」と呼ばれる拝所である。ここは山裾に大きな岩が露呈して、その岩の下に小さ

な洞窟がある。このあたりにはかつて、多くの人骨が見られたという伝承があり、ミーンズバも墓地であったのではないかと思われる。仲松弥秀のしばしば指摘するように、御嶽もまた墓地であった可能性がつよいのだから、この地も根謝銘にとっては、大切な聖地であったはずである。

この二つの屋敷の位置が示す通り、比較的歴史の浅いとされる大川ぞいのベルト地帯においても、大屋門中、野里門中はその重要なポイントをおさえている。このことはこの二つの門中が根謝銘の村建てに深く関与していることを示しているように思われる。

以上、簡単に謝名城の門中の家数分布と御嶽を中心とした聖地との関りを考察してみたが、何一つ確かな結論を導くことはできなかった。伝承と歴史と現実とが複雑にからみあい、互に自己を主張してやまない。しかし更に記述を続けることで、いま少しその関係がわかり易くなることもあるだろう。次回は、謝名城の神人組織の記述から始める。

(1) 沖縄県国頭郡大宜村謝名城。昭和五九年度の村勢要覧によれば人口二二三名、九八世帯である。山原の人々は同じ「村」でも、行政的な意味での「ソソ」と自分たちの生活する「ムラ」とを区別する。謝名城はそこに住む人たちにとっては、あくまで一つの「ムラ」である。そしてさらに複雑なことには、この小さなムラの構成単位(小字)である城、根謝銘、一名代の三地区も、明治三六年以前には「村」として記録されている。本稿ではこうした事情を考慮して、混乱をさけるために、なるべく「集落」または「地区」という用語を用いることとした。

なおまた謝名城の人たちは、自分たちの「ムラ」を「シマ」とも呼ぶが、この言葉の用法は多岐にわたるので、できるだけ避けることにした。

(2) 「マク」もまた集落をあらわす歴史の古い呼称である。これは神人組織と深いかかわりをもつと思われるので、第二章以降でややくわしくとりあげることにするが、第一章の理解のためにとりあえず次のことを指摘しておきたい。

謝名城には城、根謝銘、一名代の三つの集落に呼応して三つのマクがあり、それぞれクガニマク（黄金マク・城）、ユナハマク（世の中心のマク・根謝銘）、ユダンマク（枝のマク・一名代）と呼ばれている。ここで特徴的なことは城と根謝銘が黄金と世の中心というきわめて自己主張の強い呼称をもつものに対して、一名代が自らを枝村として自覚していることである。このことは、マクがキナ（開墾地）に対して、当初からの集落をあらわす呼称であることを考えあわせると面白い。現在ではもつとも豊かな田に面した一名代も、かつてはファルヤー（出づくり小屋）が少しづつ定住化し、分家がそこに移り住み新しいマクを形成していったのだろう。

また城を「クガニマク」と呼ぶことも、城がかつて貿易により鉄を自由にし、鍛冶職を擁した按司の居住地であったこと、またウイグシク杜の大城御嶽とウガミ杜にささやかな黄金伝説のあること（新城真恵編著・『謝名城の民俗』一九五頁、二〇一頁参照）とをあわせて考えると、マク集落形成当時の権力の源泉とその象徴がうかがえるように思われる。

(3) 『大宜味村文化財調査報告書 第2集・大宜味村の遺跡』 大宜味村教育委員会発行 一九八四年 一〇～一一頁および三三頁参照。

(4) 宮城栄昌ほか編著 『国頭村史』 国頭村役場発行 一九六七年 四九頁参照。なお図1には屋嘉比川は田嘉里川として示されているがこれは国土地理院の呼称に従ったものである。

(5) 『国頭村史』 一〇四頁参照。

(6) 「ハロウジ（ハフアロージ）」をはじめて体系的に明らかにしたのは、蒲生正男である。蒲生は、奄美・喜界島の調査の結果をもとに、四つの原理をひき出した。すなわち(1)父方母方対称の原理 (2)性および直系傍系区分の原理 (3)世代区分の原理 (4)三世代結合の原理である。

渡辺欣雄は、蒲生を引用しつつこの分析をつぎのように見事に要約している。

「(…) 《ハロウジ》の特徴とは、『単系的親族集団ではなく、双系的ないしは多系的親族集団である』こと、『系譜の本来関係に従って権威の所在が固定している単系的親族集団(…)とは(…)異質であり、相対的な世代の上下関係に権威の源泉を求めている』こと、『ある個人が参与する《ハロウジ》関係は、基本的にはその個人が所属するFamily of Orientation (…)' Family of Procreation の如何によって規定される』こと、一方それでいて、『ハロウジ』とは、

『共通の祖先をもつ人々の関係であり』、また、姻族との関係でいえば、その間に子供ができてはじめて関係が成立するものであって、《ミーハロウジ》(姻族)というものは、子供にとっての《ハロウジ》と理解されることなどであった。

(渡辺欣雄 『沖繩の社会組織と世界観』 新泉社 一九八五年 五八頁)

蒲生正男の業績に関しては、蒲生正男 『日本人の生活構造序説』 誠信書房 一九六〇年参照。

(7) 渡辺欣雄 前掲書八三頁。

(8) 門中の地域変差に関しては、村武精一 「沖繩の門中」 『神・共同体・豊穡』 未来社 一九七五年参照。

村武のそこで指摘する通り、「門中」のあるべき姿として考えている民俗モデルは、一人の男祖を共通にもつ(父系血縁)〈ヘシジ〉または〈ヘヒキ〉などとよんでいる)の集団であって、そのような血の純粹性の維持と永続のためにあらゆる努力がなされねばならないと考えている(二八〇頁)のであるが、門中の組織は実際にはかなり弾力的に受けとめられており、謝名城もまた例外ではない。

(9) 『国頭村史』 四九頁参照。

(10) 仲門門中は沖繩県中頭郡中城村からの移住者を祖先とする。現在も中城には山原墓という謝名城にすむ人たちのための墓があるという。

(11) 金城功ほか編 『大宜味村史・資料編』 大宜味村役場発行 一九七八年 二三一頁。

(12) 『大宜味村史・資料編』 二九六頁。

(13) 宮城栄昌著 『沖繩のノロの研究』 吉川弘文館 一九七九年 一〇九頁。

(14) 『国頭村史』 二九五頁参照。

(15) この場合の「シマ」はもちろん「ムラ」と同義で、謝名城をさす。

(16) 新城真恵編著 『謝名城の民俗』 若夏社 一九八五年 二〇八〜二〇九頁。

(17) 引用のかなづかいは、外間守善・西郷信綱校注 『おもろさうし』 (日本思想史大系18 岩波書店 一九七二年)による。また参考のために並記した簡単な訳は、一七六番に関しては『国頭村史』四八頁により、一八二番に関しては、それにならぬ岩波版の注解を参照して筆者がおこなった。また訳に付した*印(てくの君、金丸、まして、玉のきやく)はいずれも神の名であり、同時にそれにつかえる神人の名であると考えられる。また「崇べて」というのは、岩波版の

注解によれば「崇めて、尊んで、うやまつて」の意味であるというが、むしろ「ウタカビを行つて」という意味にとつた方がわかりやすいように思われる。「ウタカビ」というのは、儀礼に際しておこなわれる神人の祈りであり「オタカベ」ともいわれる。

ところでここで問題となるのは、「国笠」という言葉である。一八二番をすなおに読むと「国笠におわる」は「国笠におわす」となり「国笠」は地名となる。事実、岩波版の校注には、「国笠 地名。国頭郡大宜味村字田嘉里。」とある。しかし筆者の乏しい調査のおかぶかぎりでは、田嘉里には国笠という地名はない。『角川地名大辞典・沖繩』（一九八六年）には「『おもろさうし』に見える地名『くにかさ』、杜名『やかひもり』は田嘉里のうちに比定される」とあるから、現在までの実地調査では確認されていないのかもしれない。（引用傍点・筆者）

現在この地域でノロと呼ばれるような神人組織の頂点に立つ高位の神女に結びつくのは、屋嘉比のみである。そして同じ『おもろさうし』の巻一三の一七六には、「屋嘉比杜におわる 親のろは崇べて」と当時におけるその存在を証している。同じ田嘉里の国笠と屋嘉比という二つの地に、二人の高位の神女がいることは考えにくい。

そしてさらに、同じ巻一三の一七八には「国笠の親のろ 親のろは崇べて かにねて 按司添いにみおやせ 国笠の若のろ 若のろは崇べて」とあり、この場合の注解には、「国笠の親のろ 国笠は神女名。親のろは神女の尊称」とある。ここで「国笠」を神女名ととつたのは、同じ巻一三の一〇九でやはり「国笠の親のろ」を「神女国笠に対する尊称。久高島のクニチャサ神女のこと」と説明しているのと同じ解釈であろう。

一七一年に編集された沖繩最古の辞書『混効験集』には、「国笠の親のろ」は、「間切の大祝女おほむすめの事なり」と記されているのも見逃せぬ事実である。（外間守善 『おもろ語辞書』 角川書店 一九七二年参照）一七一年には、すでに中央集権的な神人組織が確立されて久しく、ノロの意味もおもろ時代とは変質しているが、「国笠の親のろ」あるいは「親のろ」と呼ばれるような神女の存在が、おもろ時代にも間切に一人かそれに近い少数であったことを示す有力な典拠と考えてよいと思う。

いずれにせよ、この点に関して最もはっきりとした立場をとっているのは、宮城栄昌である。宮城は『沖繩のノロの研究』の中で『おもろさうし』にあらわれた村落ノロを一覧表化して、屋嘉比ノロを神女名「金丸」、本来的機能「航海、島打ち」、別称・その他「国笠親ノロ」と明確に規定している（八〇頁）。もちろんこのことから「国笠」が地名であ

るか否かの解決を導くことはできないが、「国笠の親のろ」を屋嘉比と結びつけて考えることはできると思う。また地名としての「国笠」も、卑見によれば、「国」の「笠」であるから神女名と同じく地名にかかる尊称ともとることができそうである。『混効験集』が、「国笠の親のろ」を「間切の大祝女のことなり」としたように、地名としての「国笠」を「間切の中心となる聖地、あるいはそれにかかる尊称」と考えれば、田嘉里に具体的な地名「クニカサ」をさがさなくともすむのではあるまいか。

(18) 宮城栄昌・高宮廣衛編 『沖繩歴史地図』 柏書房一九八三年 四〇頁参照。『角川地名大辞典・沖繩県』（角川書店・一九八六年）は、『おもしろさうし』所出地名一覧の項でさらにおのさき（宇佐浜）ときちよかさ・きとかさ（喜如嘉）をあげているが、いずれも推定によるものであるもので、ここではとらない。

(19) 『大宜味村史・資料編』 一五七頁。

(20) 公儀ノロの成立とその神女としての役割の変遷に関しては、宮城栄昌『沖繩のノロの研究』八一〜八四頁参照。

(21) 伊波普猷・東恩納寛惇・横山重編 『球球史料叢書・第二巻』 井上書房 一九六二年複製参照。

(22) 屋嘉比ノロの管轄区のうち、浜は現在では奥間ノロの神組織に属している。これは浜が間切の分離によって国頭間切に組み込まれたためである。また城ノロの管轄区には当然根謝銘は組み込まれてはいるはずであるが、各所祭祀の項に司祭者の名がないので不明である。おそらくは『高究帳』におけるように、城村の一部と考えられていたために記載がないのであろう。城ノロの現在の管轄は、これに新しく生れた一名代を加えた六集落である。

(23) 御嶽うたきと城ぐじくに関して現在最も実証的な研究者の一人である仲松弥秀は、これとはまったく違った見解を示している。仲松の調査に基く二つの御嶽地図（『沖繩歴史地図』 柏書房 一九八三年・『角川日本地名大辞典・沖繩』 角川書店 一九八六年）には、小城嶽と中城之嶽、ガナハナ嶽とガナノハナ嶽とが明確に区別されて図示されている。

(24) 『大宜味村史・通史編』 三八〜三九頁。

〔付記〕

本稿は、社会科学研究所の共同研究助成Bによって行われた一九八六年八月二十二日より四日間にわたる謝名城調査、および、専修大学個人研究助成によって行われた同年八月八日より二週間にわたる大宜味村・国頭村調査の成果の一部

である。前者の調査は、宇都栄子、福島義和、樋口淳の三所員の共同調査であり、後者については日本民話の会の新城真恵、中本勝利、安里和子の三氏と樋口淳との共同調査である。

本稿の資料となった社会組織および民俗の聞きとりは、謝名城の皆さんの協力なしには不可能であった。ことに民俗に関して、根神であり、すぐれた伝承者である大城茂子さん、そして野里耕林さんの貴重な証言をいただいた。また門中など社会組織に関しては、上記お二人の他に平良長康さん、前田国男さん、大茂初子さん、大城昌枝さん、向井真知子さん、空間組織に関しては前田孝平さんのお教えをいただいた。またお力添えいただいた大宜味村および国頭村の教育委員会の皆さんにもこの場をかりて深くお礼申し上げる次第である。

表1 謝名城の屋敷・門中・拝所 (◎は各門中の元屋)

	屋 号		門 中			屋 号		門 中	
(1)	松	下	新	屋・松 下◎	(36)	ユ	ヒ	ナ	一
(2)	上	根	新	屋・松 下	(37)	上	門	小	大
(3)	新	門			(38)	ハ	タ	ム	ン
(4)	上	門	新	屋・松 下	(39)	彦	正	ヤ	一
(5)	仲	屋	新	屋・松 下	(40)	蔵			根
(6)	蔵	根	新	屋・松 下	(41)	正	三	郎	ヤ
(7)	仲	小	新	屋・松 下	(42)	宮	城	小	大
(8)	喜	門	新	屋・松 下	(43)	前	玉	井	大
(9)	蔵	根	新	屋・松 下	(44)	新	謝	銘	謝
(10)	旧・下	小	下	当◎	(45)	前	新	屋	野
(11)	上	門	新	屋・松 下	(46)	旧・調	完	ヤ	一
(12)	前	当	下	当	(47)	森			根
(13)	前	田	下	当	(48)	大	屋 (新門)		大
(14)	仲	前	下	当	(49)	上			大
(15)	新	屋	新	屋・松 下◎	(50)	前			大
(16)	ク	ラ	新	屋・松 下	(51)	万		川	野
(17)	前	当	下	当	(52)	後			野
(18)	嵩	根	下	嵩	(53)	山		根	野
(19)	前	嵩	嵩	嵩	(54)	東		小	野
(20)	前	嵩	嵩	嵩	(55)	東			野
(21)	新	屋	新	屋・松 下	(56)	川		端	大
(22)	新	口	嵩	嵩	(57)	上	松	下	
(23)	新	地	嵩	嵩	(58)	ト	ウ	ナ	大
(24)	松	小	新	屋・松 下	(59)	川		イ	大
(25)	伊	口	野	野	(60)	田		原	野
(26)	ヒ	東	新	屋・松 下	(61)	泉			大
(27)	田	原	ウ	ル	(62)	門		口	
(28)	蔵	当			(63)	宮	城	小	宮
(29)	玉	那			(64)	安	栄	ヤ	一
(30)	森	根	大	屋	(65)	ウ	ル	グ	チ
(31)	前	宮	大	城	(66)	門	口	小	小
(32)	蔵	根	大	屋	(67)	仲	門	小	
(33)	蔵	当			(68)	仲			大
(34)	ウ	ル	ウ	ル	(69)	前			野
(35)	あ	き	旧	公	(70)	現・公	民	館	

	屋号	門中		屋号	門中
(71)	真保ヤ一	金細工屋	(98)	伊門	
(72)	前門	大屋	(99)	溝端	
(73)	保一ヤ一		(100)	ナハンバー	金細工屋
(74)	糸満ヤ一		(101)	前東	野里
(75)	嵩根小	野里	(102)	フサキ	
(76)	幸吉ヤ一	野里	(103)	仲	大屋
(77)	現・下	下	(104)	新屋敷	大金細工屋
(78)	新		(105)	旧・殿地屋敷	
(79)	東根路銘	根路銘	(106)	上	上◎
(80)	溝	新屋・松下	(107)	徳	上根
(81)	伊	大玉屋	(108)	後仲	門
(82)	玉	玉屋◎	(109)	仲	間
(83)	根路銘小	根路銘◎	(110)	溝端	小
(84)	福地ヤ一	ウルグチ	(111)	仲	門◎
(85)	下当小	下	(112)	前仲	門
(86)	孝五郎ヤ一	下	(113)	親	上
(87)	門口小	嵩	(114)	ハンメーヤ	一
(88)	孝昌ヤ一	下	(115)	新	金細工屋◎
(89)	仲小	大金屋	(116)	前	上
(90)	山城小	金細工屋	(117)	伊	上
(91)	次春ヤ一	大金屋	(118)	保光ヤ一	金細工屋
(92)	上	金細工屋	(119)	調完ヤ一	宮
(93)	仲		(120)	仲屋	新屋・松下
(94)	旧・新屋小	金細工屋	(121)	亀次ヤ一	新屋・松下
(95)	保仁ヤ一	金細工屋	(122)	現・新屋	新金細工屋
(96)	森	金細工屋	(123)	保ヤ一	金細工屋
(97)	金細工屋	金細工屋◎	(124)	五郎ヤ一	金細工屋

a	中城御嶽	h	クランマー
b	アサギ	i	御殿ガー
c	大城御嶽	j	チンガー, サーガー, ナーガー
d	御殿(ウドゥン)	k	ヒンバー杜
e	御殿ニーズ・殿地ニーズ	l	新地ンスバ
f	首里前	m	ミッカーガー
g	ノロ殿地		

図2 謝名城の屋敷・門中・拝所

(■は門中の元屋。拝所は本稿に関するもののみにとどめた。)



図3 謝名城の門中分布

- 新屋・松下門中の系統
- 大屋門中と野里門中
- その他の門中

